

研究題目：CLILにおける内容指導と言語指導の効果的統合法

研究期間：2014年6月1日～2015年9月31日

研究代表者：吉田研作（上智大学言語研究センター）

共同研究者：池田真（上智大学文学部英文学科）

山野有紀（宇都宮大学教育学部）

1 研究概要

我が国における教育行政のキーワードの一つはグローバル人材の育成である。グローバル教育＝英語教育ではないにせよ、世界の人々と協働するには共通言語の習得が不可欠であり、語学教育がその中核を占めることは疑いがない。国際的人材の養成は日本に限らず各国が取り組んでいるが、ことに域内の交流が盛んなヨーロッパは、政策、理論、研究、実践の上で先駆的である。その欧州において、この10年間で急速に普及したのが、CLIL (Content and Language Integrated Learning) と呼ばれる教科学習と語学学習を統合した教育法である。CLILは教科と語学だけでなく、多角的思考、共同学習、異文化・国際理解を原理として取り込んでいるため、21世紀型のグローバル教育そのものと言える。我が国においては、2011年から2013年までの本委託研究（課題名：日本でCLILを実践するための教育技法、教材、研修の開発）の成果により、CLILの知名度と関心が高まり、全国各地に実践が広まりつつある。本取り組みでは、CLILをさらに普及させ、かつその教育法の質的向上を目的として、科目学習と語学学習を有機的に統合する具体的指導技法の開発を行った。これはヨーロッパの最先端の研究動向に沿った取り組みでもあり、当該分野の国際的発展に寄与することも意図したものである。

2 研究方法

本研究は以下の3つの方法により行った。

(1) 理論研究

研究書、実践書、論文、学会、シンポジウムで最新の理論、実践、研究に触れ、原理に基づき効果的とされる指導技法を体系的にまとめた。

(2) 実例研究

ヨーロッパのCLIL授業ビデオや教材の分析、および日本でCLILを実践する大学や高校での授業観察や授業日誌の分析により、実践例を蓄積した。

(3) 実践研究

上記(1)(2)で得られた指導法を研究代表者および共同研究者の本務校である上智大学や、研究協力校である埼玉県立和光国際高校で実践し、その実用性を検討した。

3 研究成果

本研究により、以下の「内容と言語の効果的統合法」が明確化され、体系化された（池田 [近刊] より抜粋）。

(1) 内容と言語の統合レベル

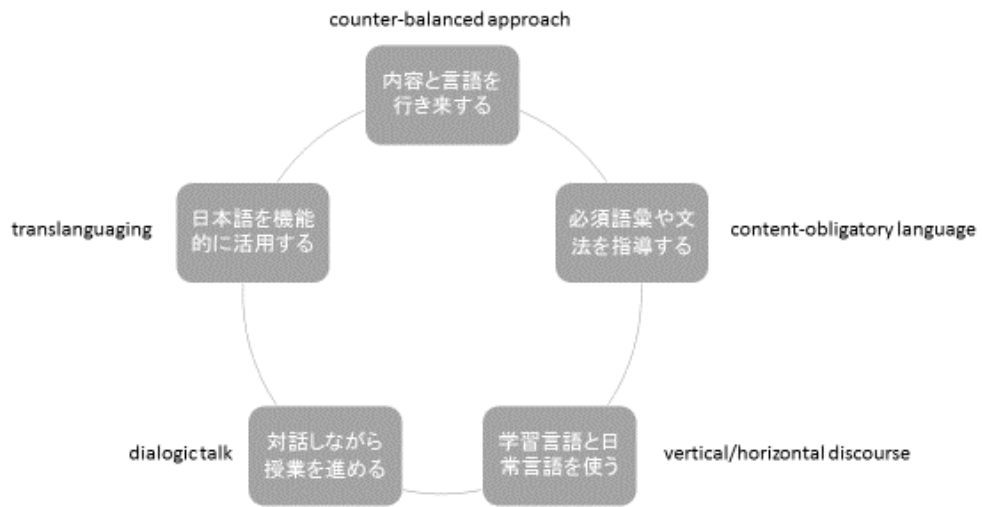
CLIL における内容と言語の統合は、マクロレベルからマイクロレベルまで、大きく 4 種類に分けられる。

レベルA 言語スキル	レベルB 学習スキル	レベルC 言語システム	レベルD 指導テクニック
読む 聞く 書く 話す	要約の方法 ノートの取り方 エッセイの書き方 プレゼンの方法	語彙 文法 発音 談話	言語的な説明 言語形式への気づき 定着のための練習 誤りの訂正や助言

レベル A の言語技能は内容を英語で学べば自然にカバーされるが、レベル B のアカデミックスキル、レベル C の言語知識、レベル D の言語指導は、授業設計の段階から計画的に取り込む必要がある。換言するならば、単に英語で教科内容やトピックを教えるだけでは、CLIL ならではの統合効果が出にくい。そこで必要になってくる概念が、次に示す「言語意識」(language awareness)である。

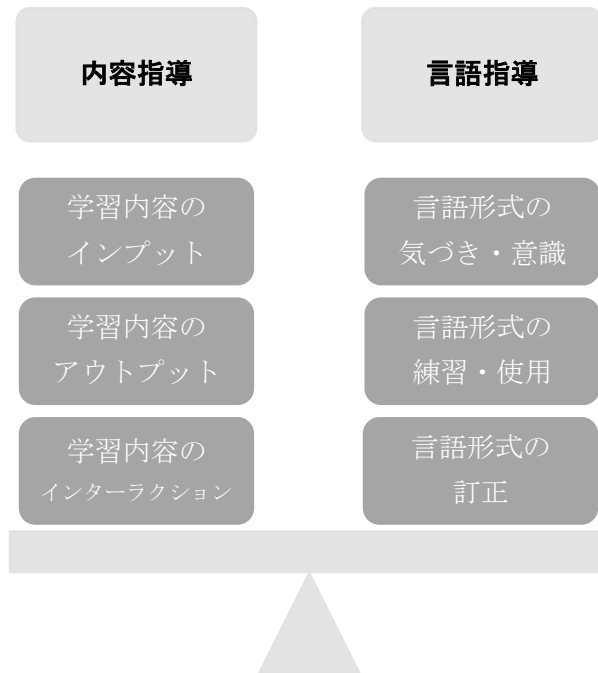
(2) CLIL における言語意識

内容と言語の相乗的学習効果を高めるための言語意識は、下図のような項目からなる。12 時の位置から時計回りに概観する。



(2-1) カウンターバランス指導法 (Counter-balanced approach)

カウンターバランス指導法とは、内容学習と言語学習のバランスを取って指導しようとする態度と方法である(Lyster, 2007)。それは、以下のように、学習内容のインプット（聞く・読む）、アウトプット（話す・書く）、インターアクション（教師と生徒のやり取り）の 3 つの学習段階で行われる。



まず、新しく学ぶ内容（教科単元やトピック）は、教師の説明、映像の視聴、文章の読解

といったリスニングやリーディングによるインプットを通して与えられる。その際に教師は、ゆっくりと話す、要点を繰り返す、同意語を用いる、キーワードを強調する、定義を与える、分かりやすい例を出す、図表を用いる、といった様々な足場（学習のサポート）を用意する。これらは意味内容の理解を助けはするが、言語ポイントの習得には直接は結びつかない。カウンターバランス指導法では、口頭インプットの場合にはイントネーション、ストレス、ジェスチャーなどで、文章インプットの場合には太字、下線、斜体字、色付けなどで、ポイントとなる言語形式（主に文法）に学習者が気づくように仕向ける。その上で、必要に応じて、規則を発見させたり、他の言語形式と比較させたり、言語的な説明を加えたりして、その言語形式に対する意識を育てる。次に、インプットにより理解された新学習内容は、ペアやグループで取り組むタスクにより、定着させられ、発展させられる。そこで話し合ったり、考えたりしたことは、プレゼンテーション、ポスター、エッセイなどの形でアウトプットされる。カウンターバランス指導法では、そのための鍵となる言語形式を設定し、その使用を推奨する。例えば、歴史の授業で動詞の不規則活用をターゲットに設定するとする。その際には、現在形を使って年表を作成させ、過去形を用いて各歴史的事件のあらましを説明させる。このように、学習している内容やその場の文脈と切り離さずに、ターゲットとなる言語形式を練習させることが重要である。

(2-2) 内容必須言語 (Content-obligatory language)

教科内容にせよ、科目横断型トピックにせよ、その分野を学ぶ上で絶対に必要となる言語知識がある(Coyle, Hood, & Marsh, 2010; Chadwick, 2012)。それは主に語彙であるが、文法の場合もあるし、発音のこともある。特に重要なのは、概念が含まれている用語である。栄養成分に関してだと、protein（蛋白質）、fat（脂質）、carbohydrate（炭水化物）、vitamin（ビタミン）は、意味、発音、綴りはもちろんのこと、それぞれの働きまで理解させなければならない。したがって、CLILの教材研究では、鍵となる用語や概念を中心に、理解、思考、表現を促す学習活動（タスク）を考案することになる。

(2-3) 学習言語と日常言語 (Vertical/horizontal discourse)

CLILでは科目単元や社会的テーマなどを扱うので、学習する言語タイプはCALP (Cognitive Academic Language Proficiency=認知学術言語能力)を育てるものが中心となる。CLIL教師の重要な務めは、それに加えて、学習内容を生徒の生活、興味、体験、意見と結びつけることで、BICS (Basic Interpersonal Communication Skills=基本的対人コミュニケーション技能)の使用を意識的に行うことである(Linares, Morton, & Whittaker, 2012)。前者を縦糸とするならば、後者は横糸であり、両者を織り合わせることで総合的な英語運用の素地が出来上がる。例えば、栄養成分の授業ならば、“Fermented soy beans are a good source of protein. Proteins are essential for your body to grow and remain healthy.”は垂直的談話(CALP)であるが、“Do you eat *natto* in the morning?”, “Why do you like/hate *natto*?”, “What else do you usually have for

breakfast?”などは水平的談話(BICS)である。CLIL の潜在的な教育効果を引き出すには、2つの談話タイプを常に視野に入れる必要がある。

(2-4) 対話型授業 (Dialogic talk)

CLIL の授業は対話を通して行われる。ここでいう対話とは、いわゆる IRF に対する概念である。IRF とは、教師の発問(initiation)に対して生徒が応答(response)し、それを教師が評価(feedback)するという典型的な教室でのやり取りである。例えば、“What do you need to eat to get protein?”, “Meat, fish and beans.”, “Excellent!”といった流れである。このような一往復半のやり取りだけでは、授業は活性化せず、生徒のコミュニケーション能力も育たない。それを避けるためには、正解を問う質問(display questions)の後に、自由に答えられる質問(referential questions)を加える。例としては、詳しく説明させる、理由を説明させる、具体例を列挙させる、経験を語らせる、意見を語らせる、のような発問である(Linares, Morton, & Whittaker, 2012; Lyster, 2007)。

(2-5) トランスラングエッジング (Translanguaging)

CLIL の授業では、全ての活動を英語で行うのが基本である。インプットの量を確保し、インタラクションを促し、アウトプットの機会を設けるためである。ただ、実際には、タスクへの指示を与えたり、複雑な概念を理解させたり、英語での議論が困難である場合には、母語への切り替えも行われる。いわゆる言語切り替え(code-switching)である。このような、従来からある母語使用法に対し、この数年で台頭してきたのがトランスラングエッジングと呼ばれる積極的母語活用である。これにはまだ一致した定義がないが、今のところは「教え学ぶために二言語を同一授業で計画的かつ体系的に使うこと」(“planned and systematic use of two languages for teaching and learning in the same lesson”, Lewis, Jones, & Baker, 2012: 643)や「二言語を使うことで、意味を作り、経験を成し、理解や知識を得る過程」(“the process of making meaning, shaping experiences, gaining understanding and knowledge through the use of two languages”, Baker, 2011: 288)のように捉えられている。具体的な学習活動としては、英語の文章や映像のポイントを日本語でメモし、それをもとに与えられたテーマについて英語や日本語で議論し、話し合った結果を英語で発表したり、文章にまとめるといった活動になる。このような授業法の理由付けとしては、そもそも学習者の多くは脳内で二言語での情報処理を行っており、だとすると特に CLIL のような内容や思考に重きを置く教育法だと、両言語を活用した方が学習全体が最大化し活発化し深化することになる、とか、実社会でも母語と外国語の行き来はよくあることで両言語の併用はひとつのスキルですらある、といった点があげられる(García & Wei, 2014)。ここで重要なのは、意識的に両言語を同時使用させるということであり、妥協として母語に訳すといったことではない点である。

参考文献

- 池田真（近刊）「CLIL 活用の新概念と新ツール」、池田真、渡部良典、和泉伸一編著、『CLIL 内容言語統合型学習：上智大学外国語教育の新たな挑戦』、第 3 巻（授業と教材）、上智大学出版。
- Baker, C. (2011). *Foundations of bilingual education and bilingualism* (5th ed.). Cleveland, UK: Multilingual Matters.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- García, O. & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Lewis, G., Jones, B., & Baker, C. (2012). Translanguaging: Origins and development from school to street and beyond. *Educational Research and Evaluation*, 18 (7), 641-654.
- Linares, A., Morton, T., & Whittaker R. (2012). *The roles of language in CLIL*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyster, R. (2007). *Learning and teaching languages through content: A counterbalanced approach*. Amsterdam: John Benjamins.

4 成果発表

以上の研究成果の一部ないし全部は、以下の方法により国内および欧州にて発表した。

出版物

2015 年 10 月

「語学能力の育成から汎用能力の育成へ：コンピテンシー・ベースによる 21 世紀型英語教育」（奈須正裕、江間史明（編）、『教科の本質からコンピテンシーへ：資質・能力を中心に据えたカリキュラム編成と授業づくりのために』、図書文化社）

2015 年 11 月

「21 世紀のグローバル英語教育：CLIL（内容言語統合型学習）の理念と方法」（全国英語教育研究団体連合会、『全英連会誌』、第 53 号、4-11 頁）

2016 年 4 月

『Colombus 21 English Course 1』（共著、文部科学省中学校検定教科書、光村図書）

『Colombus 21 English Course 2』（共著、文部科学省中学校検定教科書、光村図書）

『Colombus 21 English Course 3』、共著、文部科学省中学校検定教科書、光村図書）

近刊

『CLIL 内容言語統合型学習：上智大学外国語教育の新たな挑戦』、第 3 巻（授業と教材）、（共著、上智大学出版）

講演・シンポジウム・ワークショップ

2015年5月

「英語による教科授業の参観ポイント」(「IB(国際バカロレア)とCLIL(内容言語統合型学習):保護者と教師のためのバイリンガル教育シンポジウム」、上智大学国際言語情報研究所シンポジウム)

“Principles and pedagogies of CLIL”(島根県立大学CLILシンポジウム)

“Principles, pedagogies and practice of CLIL”(学習院大学国際社会学部教員研修)

2015年6月

「CLIL(内容言語統合型学習)の原理と活用」(北海道立教育研究所外国語指導力向上研修講座)

「CLIL(内容言語統合型学習):21世紀型の英語授業を体験する」(平成27年度全国私立中学高等学校私立学校特別研修会、外国語(英語)教育改革特別部会)

「CLIL(内容言語統合型学習)の原理と指導法」(仙台白百合学園小学校校内研修)

2015年7月

「21世紀グローバル時代の英語教育法:CLIL(内容言語統合型学習)の原理と方法」(全国英語教育研究団体連合会夏季全国理事会高校部会・研究協議会)

「21世紀型の教育CLIL」(仙台白百合学園小学校教育シンポジウム「使える英語で広がる可能性」)

“CLIL teacher development workshop”(Stephanie Grayston & Helen Smith, RMIT University, Australia)(上智大学国際言語情報研究所講演会)

2016年3月

“Translanguaging in tertiary CLIL in Japan: Conceptualisation, pedagogy and research”(Research Workshop in Language and Literacy, King’s College, University of London, England)

“Tertiary CLIL and translanguaging: An approach to Content and Languages Integrated Learning”(Higher Seminar at the Centre for Research on Bilingualism, Stockholm University, Sweden)

“Implementing translanguaging in tertiary CLIL in Japan: Its contextual, conceptual, pedagogical and research agendas”(Translanguaging Network Meeting, Dalarna University, Sweden)

“CLIL as an educational platform for innovative language pedagogies”(Seminar: English language teaching and learning, Universidad Autónoma de Madrid, Spain)

5 今後の展望

本課題は、実質的な研究期間が1年余と短いため、指導技法の開発と実践に留まっている。今後もCLILに関する受託研究が継続される場合は、ここで提唱された「言語意識に基づく内容と言語の統合的指導法」による授業の質的向上や、内容・語学・認知面での学習効果に関するデータを教室で収集し、分析する実証研究に進みたいと考えている。

以上